



「両親と夫に感謝しています」と、清美さん。黒板の字は左手で書くなど工夫している（秦野市立大根中学校で）

退院後も復職目指して

神奈川県秦野市の中学校英語教諭、谷津清美さん（35）は2007年3月の修了式の朝、脳出血で倒れた。

学校から救急車で病院に運ばれ、命は取り留めたものの、右手や右足にまひが残った。1か月後、発症後半年間（回復期）のリハビリテーションを行う病院に入院。集中的なりハビリのおかげで、自力で歩けるよ

うになり、8月には自宅に帰ることができた。しかし問題は退院後であった。

「もうリハビリに通う必要はない、と退院時に言われました。日常の生活動作すべてが訓練になるから、と」（清美さん）
だが自力歩行ができるとはいえず、つえに頼ってゆっくり歩くという状態。近くの散歩もままならない。復

職を目指すのが、テレビを見て夫の帰りを待つ日が続いた。

心配した母親の美幸さんが、テレビ番組で熱心なりハビリが紹介されていた相澤病院（長野県松本市）に手紙で相談。08年3月、清美さんは同病院を受診した。総合リハビリテーションセンター長の原寛美さんは「リハビリの目的は、患

は、この装具のおかげで徐々に、つえなしでも歩けるようになった。まひした右手には、ボールをつかんだり、雑誌をめくったり、字を書いたりする練習を繰り返した。

月に1回通院し、同年6月から、紹介された昭和藤が丘病院（横浜市）で週1回1時間程度のリハビリを受けた。黒板に字を書いたり、掲示物を壁に張ったりする、学校特有の動作の訓練も行った。

「歩くのは速くなったし、鈍い右手の感覚も、ずいぶん戻りました」（清美さん）
09年春、清美さんは2年ぶりに勤務先の秦野市立大根中学校（川口一正校長）に復職を果たした。授業も通常通り行っている。

清美さんは、まひした右手足を使わないために、思うように回復が進まず、発症から1年を経過しても、つえなしでは歩けなかつた。そこで、まひした右足に体重をかけても平気なように、地面につく際の反動を和らげる装具を右足首につけることにした。

自宅に戻った清美さん

原さんは「欧州の治療指針では、脳卒中発症後1年は医師が指導するリハビリが必要とされている。回復後のリハビリは軽く見られがちだが、適切な訓練によって一層の回復が期待できる患者も多い」と話す。